

○黒川 達夫<sup>1</sup>

<sup>1</sup>千葉大院薬

医薬品の安全性問題を振り返ると、新薬として医療の場に登場し、日も浅いうちに深刻な副作用問題に直面した医薬品が少なくない。市販直後の安全対策の重要性が繰り返し強調される由縁である。今後分子生物学や遺伝子領域の生物学の進展を背景に、作用メカニズムの新しい医薬品が増えるに連れ、この時期の育薬の重要性は増大するものと思われる。一方、従来から特定の副作用発現リスクが指摘され、注意が喚起され続けているものの、その発生率やイベントがあまり減少せず、頭打ちになっている医薬品群がある。患者の立場から見れば新薬もその他の医薬品も、等しく安全であって欲しいことには間違いはないが、医薬品の専門家の間には、それと明確に意識される形ではないが、関心の濃淡や諦観的な現状の受け入れがあり得ないか、という仮説がなり立つ。患者や国民の側を見ても、例えば数年前に、納豆によるダイエットの可能性がTVで繰り返えし提供された結果、納豆の消費が急速に増大した事例が示唆するように、認知していること（＝納豆でダイエットは、おかしい）と、採取的な選択や行動（＝でも、ご近所もたくさん買いはじめたから買おう）は、社会や生活の様々な場面で非直線的な形を示し、様々な影響を与えている。

医薬品は一旦承認された後は社会全体に対し説明責任を負う立場になることから、このような社会心理学的な見地からの考察も加え、ひろく市販後安全対策を論ずる。